

長崎原爆遺構を歩く

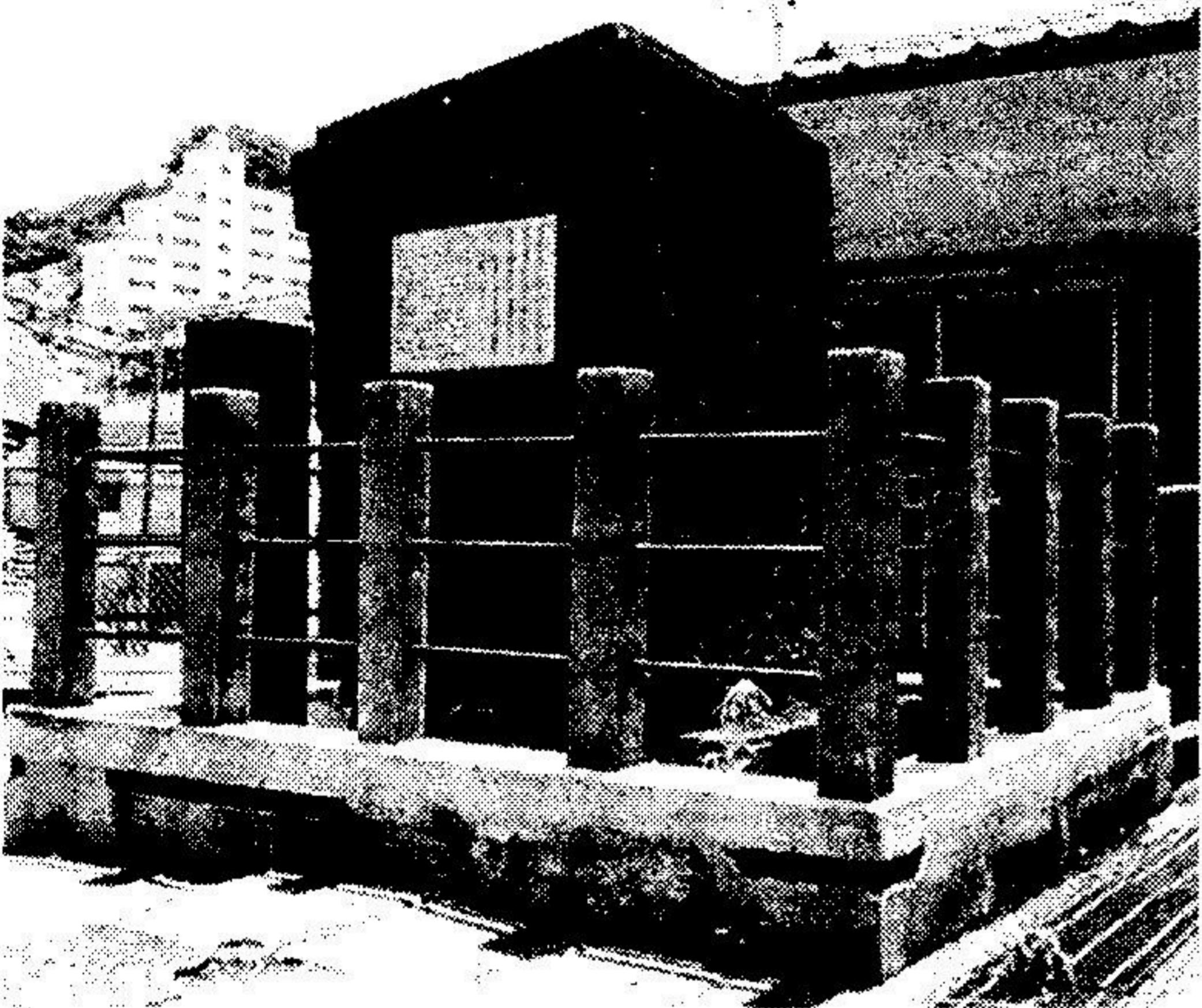
県原水協常任理事 内田 武志

原爆投下時、長崎大学 医学部(旧長崎医科大学)では、講堂で講義が行われていました。この講堂にいた教官や学生たちの多くは倒壊した建物の下敷きになり、その後発生した火災で焼死しました。辛うじて脱出した人たちも一カ月以内に急性の原爆症で全員が死亡した。現在、残っている被

ました。大学関係者と学生の死者数は八百九十五人にのぼっています。学長はじめ、これらの犠牲者名は真ちゅう製銘板に刻まれ、医学部記念講堂に掲げられています。

医科大学は大部分が木造建築だったため、ほとんど全壊・全焼しました。現在、残っている被

長崎大学医学部 坂本町1丁目



傾いた医学部の門柱

7トン門柱が傾いたまま

⑥

爆建造物は、当初宿泊施設としてつかわれ、被爆時には受電室となっていたゲストハウス一棟のみです。分厚いコンクリートの建物で大きく破壊されることもなく原型をとどめています。

大学構内のグビロヶ丘には被爆した大講堂玄関にあった柱を使用した「慰霊碑」が建ち、碑の裏面に同大学教授であった永井隆博士の「傷つける友をさがして火の中へ」とび入りしままかえらざりけり」の歌が刻まれています。

当時の長崎医科大学・同付属薬学専門部の正門の石造の門柱も残されています。一・二桁四方、高さは土台を除くと一・八桁、およそ七トンはあるといわれる門柱が、強烈な爆風で、前方に約九センチ、一〇度ほど傾き、後方が十五センチほど浮き上がったままになっています。(つづく)